

山之城跡

Yamanoshiro Site

主要地方道宮崎西環状線（北川内工区）地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

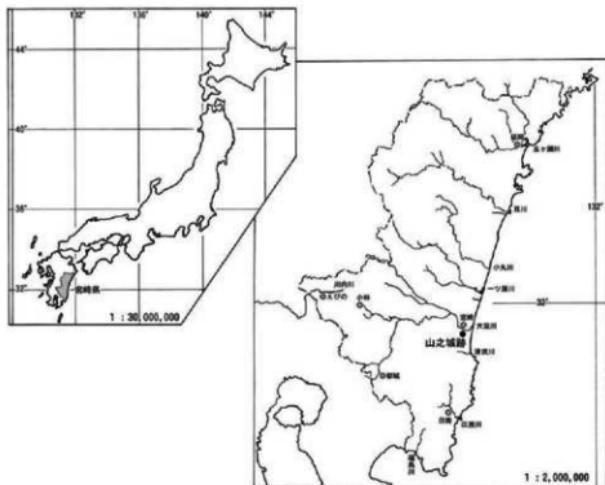
2008

宮崎県埋蔵文化財センター

山之城跡

Yamanoshiro Site

主要地方道宮崎西環状線（北川内工区）地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2008

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、主要地方道宮崎西環状線（北川内工区）地方道路交付金事業に伴い、山之城跡の発掘調査を行いました。

山之城跡がある古城町周辺は、戦国期には伊東氏、島津氏間の宮崎平野中央部における争乱の中心地であり、曾井城を中心として本城、古城、そして今回調査を行った山之城などが築かれた要害の地がありました。

また、周辺には弥生時代の絵画土器が多数出土した中岡遺跡を筆頭に、九拾田遺跡、倉詰遺跡などの弥生時代の遺跡が知られており、古い時代から人間の生活痕跡が認められる地域もあります。

今回の調査では、山之城の裾部より古代から中世にかけての遺構や遺物が検出されており、山之城の成立時期を考える貴重な資料を提供できました。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成20年2月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

例　言

1. 本書は、主要地方道西環状線（北川内工区）地方道路交付金事業に伴い、宮崎県教育委員会が調査主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが行った山之城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮崎土木事務所の依頼を受け宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 山之城跡の発掘調査期間は、平成19年8月20日から平成19年9月26日である。
4. 現地における実測図の作成は主として和田理啓が行い、福田泰典と若松宏一がこれを補助した。
5. 遺物・図面の整理は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成、遺物実測およびトレースは、主に和田と整理作業員が行った。また、縄張り図の作成については福田が行った。
6. 本書の執筆および編集は第Ⅱ章第3節を福田が、それ以外を和田が担当した。また、使用した写真については、和田が撮影した。
7. 空中写真撮影は「有限会社ふじた」に委託した。
8. 本書で使用した座標は世界測地系九州第Ⅱ系に準拠し、方位は座標北である。また、レベルについては海拔絶対高である。
9. 本書で使用した位置図は平成5年12月1日国土地理院発行の2万5千分の1図『宮崎』を、周辺地形図は平成15年宮崎市作成の2千5百分の1図『宮崎市現況図』135-62をもとに作成した。
10. 本書で使用した色調の標記は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財團法人日本色彩研究所監修の『新版　標準土色帖』を参考にした。
11. 出土遺物その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯.....1

第2節 調査の組織.....1

第Ⅱ章 山之城跡の調査

第1節 遺跡の位置と歴史的環境.....2

第2節 調査の内容

1 調査の概要.....5

2 層 序.....6

3 遺 構.....6

4 遺 物.....8

5 小 結.....12

第3節 中世城郭としての山之城跡.....16

第4節 まとめ.....18

挿図目次

第1図 山之城跡と周辺の遺跡.....3 第10図 出土土師器実測図①.....9

第2図 調査位置図.....4 第11図 出土土師器実測図②.....10

第3図 遺構配置図.....5 第12図 出土土師器実測図③.....10

第4図 調査箇所土層堆積状況.....6 第13図 出土須恵器実測図①.....10

第5図 溝状遺構実測図.....6 第14図 出土須恵器実測図②.....11

第6図 1号掘立柱建物跡実測図.....7 第15図 出土磁器実測図.....11

第7図 2号掘立柱建物跡実測図.....7 第16図 出土遺物実測図.....12

第8図 土坑実測図.....8 第17図 山之城跡縄張図.....17

第9図 遺構内出土遺物実測図.....9

表目次

山之城跡出土遺物観察表.....13

図版目次

滑石製品.....11

板碑発見状況（第17図a付近）、発見された板碑（山形～碑身上部）.....18

山之城全景、山之城跡遠景、調査箇所遺構分布状況.....19

溝状遺構検出状況、東播系須恵器片口鉢出土状況、溝状遺構完掘状況、1号掘立柱建物跡、

2号掘立柱建物跡、土坑.....20

遺構内出土遺物、出土土師器①、出土土師器②、出土土師器③、出土須恵器、

出土磁器・石器・鉢滓.....21

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

県道9号宮崎西環状線は国道10号、219号などの基幹道路と接し、平和ヶ丘、小松台、大塚台、生目台などの大規模住宅地の近辺を通る宮崎市西部一帯の交通を担う主要地方道である。宮崎市中心部に流入する通過交通を排除し、市街地周辺地域における南北間相互の円滑な交通を確保する外環状道路であり、渋滞対策事業にも位置付けられている。

北川内工区は、生目台団地から県道宮崎田野線に至る区間であり、完成後は大規模住宅団地（生目台団地、大塚台団地）と市街地間における交通混雑の大幅な緩和や、市周辺部から空港、高速ICなどの交通拠点へのアクセスが飛躍的に向上することが期待されている。

今回調査対象となった山之城跡は、平成14年度から県文化課（当時）と宮崎土木事務所の間で協議が進められ、平成18年度に県文化財課により確認調査が行われた。確認調査の結果、遺物、遺構などはみられなかったが、工事が地元でも「ヤマンジョ」と呼ばれるよく知られている中世城郭である「山之城」の一部に影響を及ぼすことが明らかであったため、発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、用地買収との関係から、平成19年8月20日から行うことになった。

第2節 調査の組織

山之城跡の調査における調査組織は、以下のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

平成19年度 発掘調査および整理作業

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

副所長 加藤 恒郎

総務課長 宮越 尊

総務担当リーダー 高山 正信

調査第二課長 石川 悅雄

調査第三担当リーダー 福田 泰典

調査第三担当 主査 和田 理啓（現地調査・整理作業担当）

同主任主事 甲斐 貴充（整理作業担当）

事業調整

宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当 主査 吉本 正典

第Ⅱ章 山之城跡の調査

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

山之城跡は、大淀川の河口から西に約7km、北を北川内川、南を古城川に挟まれた標高約57mの独立丘陵上に位置する。周辺には50m~70m程度の丘陵が分布し、花山手や生目台といった大淀川右岸の大規模新興住宅地の開発が進んでいる。これらの丘陵上では、内野々遺跡（第1図5）、中岡遺跡（第1図4）や山城遺跡（第1図2）、倉詰遺跡（第1図6）などの弥生時代の遺跡が知られている。特に中岡遺跡の土器焼成土坑では弥生後期から終末にかけての土器が大量に出土している（野間重孝、荒武麗子1987）。また、分布は決して密ではないが、丘陵に接した沖積地でも九拾田遺跡（第1図3）や下古城遺跡（第1図12）などの散布地が確認されており、周辺小河川を利用しての水田経営に伴い丘陵上に集落が営まれたことが予想される。

古墳時代の遺跡については、近辺の曾井周辺に曾井横穴や、貨泉が出土したと伝えられる曾井古墳などが知られる。曾井周辺については、かつては耕作地内にいくつかの古墳が存在したようであるが⁽¹⁾、現在、墳丘が確認できるものはない。古代の遺跡に関しては、断片的な資料は得られているが、あまり顕著な事例は知られていない。いずれにしろ、古代以前については、古くからの生活の痕跡が認められるものの、明確な時代描写が可能なほどの資料には恵まれていない。

「山之城」の記述が文書に現れるのは都城島津家文書の「文明六年三州處々領主記」に「山東城」の一つとして名前が挙がっている（宮崎県1998）のが初例である。また、「宮崎県の地名」では、大田城を当地に比定している（平凡社地方資料センター編1997）が、この推定が正しければ、大田城が文書に現れる建武3（1336）年以前には城郭が成立していたことになる。このとき、大田城には北朝方の島山直頭が入城しており⁽²⁾、肝付氏などの南朝方に対する拠点の一つとなっていたようである。

戦国期にはいると、曾井周辺は島津、伊東両氏による日向平野部の覇権争いの中心地となり、曾井城（第1図11）を中心とした攻防が行われる。山之城（第1図1）も古城（第1図9）、本城などとともにこの要害の地を形成した一城だった様子がうかがえる。

- (1)『宮崎縣史蹟調査』第一輯（宮崎県1927）には鹿児島島の山崎五十鈴の報告として、墳丘が2、3基確認できたことが記されている。また、古墳出土と伝えられた貨泉についても、その出所がはっきりしない旨が記されている。
(2)『宮崎県の地名』によれば、「当城に島山直頭がいたとは思えないが、ここが北朝方の結集場所となっていた。」（平凡社地方資料センター編1997）とある。

引用・参考文献

清武町教育委員会1990『清武町遺跡詳細分布調査報告書』清武町埋蔵文化財報告書第4集

平凡社地方資料センター編1997『宮崎県の地名』日本歴史地名大系46

宮崎県1927『宮崎縣史蹟調査』第一輯

宮崎県1998『宮崎県史』通史編 中世

宮崎県教育委員会1998『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』I 地名表・分布地図編

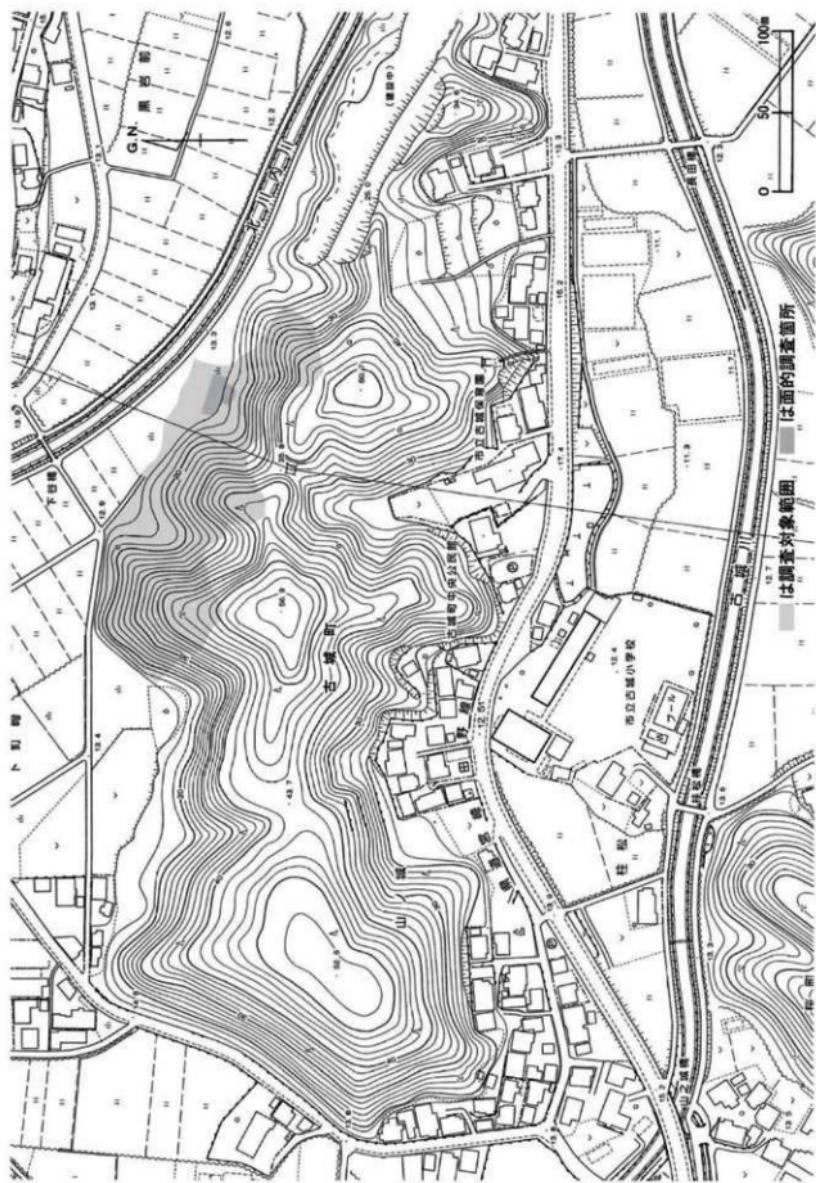
宮崎市教育委員会1987『中岡遺跡』宮崎市文化財調査報告書

宮崎市教育委員会1990『宮崎市遺跡詳細分布調査報告書』II



- 1 山之城跡 2 山城遺跡 3 九拾田遺跡 4 中岡遺跡 5 内野々第3遺跡 6 倉詰遺跡
 7 門前遺跡(伊満福寺) 8 古城遺跡 9 古城跡 10 曾井第2遺跡 11 曾井城跡 12 下古城遺跡
 13 源藤遺跡 14 囲ノ屋敷遺跡 15 福神屋敷遺跡 16 町ノ前遺跡 17 ぎょもん屋敷遺跡
 18 長嶺遺跡 19 不動迫遺跡 20 清武城跡 21 下猪ノ原遺跡 22 園田遺跡 23 早松遺跡
 24 古陣遺跡 25 中ノ尾第1遺跡 26 中原遺跡

第1図 山之城跡と周辺の遺跡 (S=1/25000)



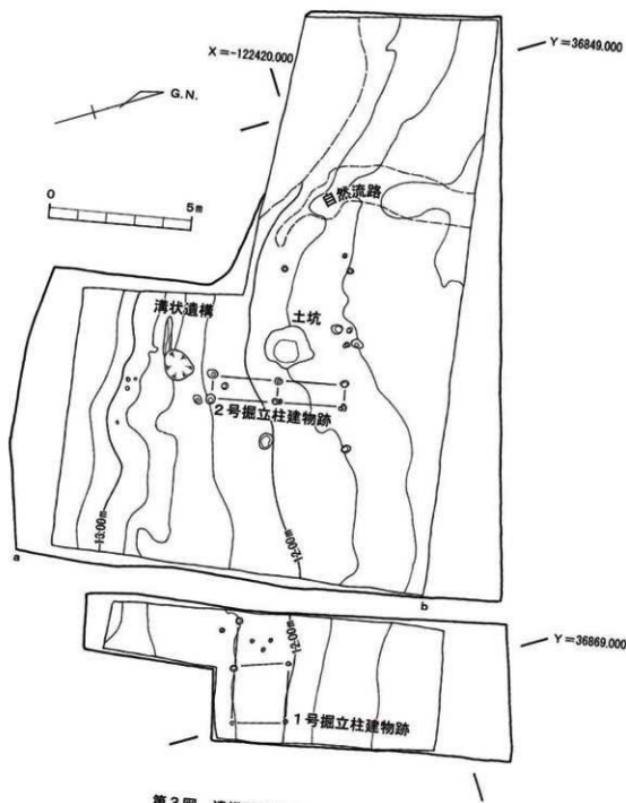
第2図 調査位置図 (S=1/3000)

第2節 調査の内容

1 調査の概要

調査は、当初、中世城郭山之城関連の遺構を確認することを目的として、丘陵平坦部分にトレーンチを設けたが、各トレーンチからは、遺構、遺物ともに確認されなかった。また、山之城関連遺構の有無を確かめるため、丘陵裾部にトレーンチを設置したところ、古代から中世にかけての遺物とピットなどの遺構が確認されたため、周辺約312mについて面的な調査区を設定して調査を行うこととした。

調査の結果、掘立柱建物跡2棟、土坑1基、溝状遺構1条、その他ピット群や自然流路が確認された(第3図)。



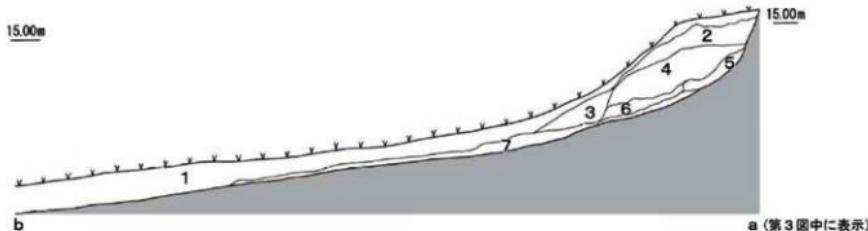
第3図 遺構配置図 (S=1/150)

2 層序

本遺跡の土層は7層に分層した。1層は褐色で、宮崎層群の風化土に腐葉土が混入したしまりのない土である。2～5層は宮崎層群から遊離した礫や再堆積の火山灰等を含む土であり、丘陵上からの崩壊土であると考えられる。

6層は、暗褐色の粘性の高い粗砂で、丘陵からの崩落土を含んでいる。古代～中世にかけての包含層で、旧流路内や遺構内の覆土も同様のものである。

7層は明黄色のシルト質細砂で、崩落した砂岩の岩塊を含んでいる。遺物の出土はみられない。

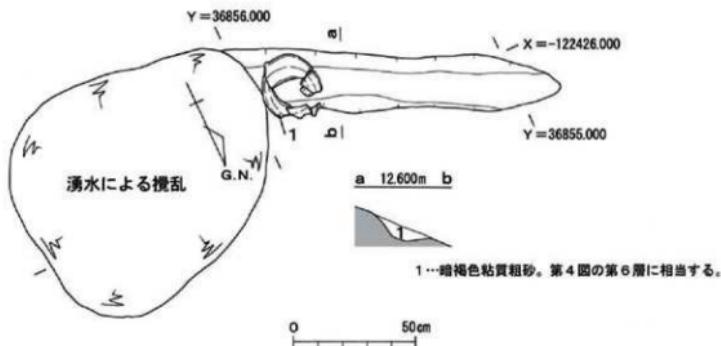


第4図 調査箇所土層堆積状況 (S=1/100)

3 遺構

(1) 溝状遺構 (第5図)

調査区の中央南よりで溝状遺構が1条検出された。東側は湧水により陥没しており、遺構が残存していない。現状で長さ約1.4m、幅20～24cm、検出面からの深さ約10cmを測る。遺構内からは、東播系須恵器の片口鉢（第9図1）が口縁部を下にして伏せた状態で出土している。

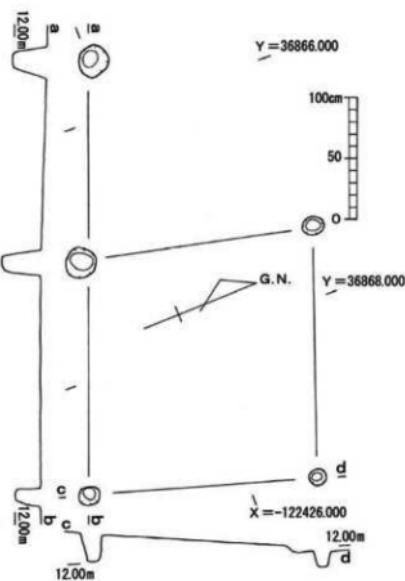


第5図 溝状遺構実測図 (S=1/20)

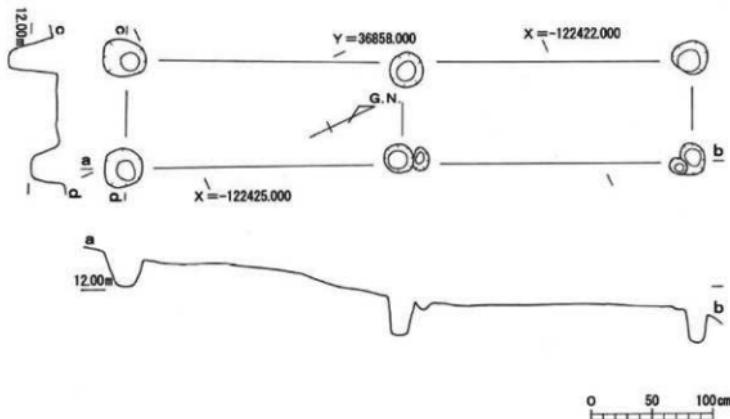
(2) 挖立柱建物跡 (第6図・第7図)

掘立柱建物跡が2棟検出されている。1号掘立柱建物跡は調査区の東側で検出された。等高線に平行する形で建てられており、南側桁行約3.6mで2間、柱間は東から約1.9m、約1.7mを測る。北側桁行は約2mで1間、梁間は約1.9mで1間である。柱穴は検出面で径20cm前後とあまり大きくなく、その並びは平面形でやや拉げた形になるなど企画性に乏しい面もみられ、恒常的な建物とは考えにくい。

2号掘立柱建物跡は、調査区の中央やや南よりで検出された。桁行約4.6mで2間、柱間は北から約2.2m、約2.4mを測る。梁間は80~90cmの1間で、南北に非常に長い1間×2間の建物になる。柱穴の径は25cm~40cmを測り、柱間のとおりもよいなど1号掘立柱建物跡に比べ企画性は高い印象を受ける。梁間が非常に狭いこと、等高線に対し直行する形で建てられていることなどから、棚のような施設であった可能性も考えられる。



第6図 1号掘立柱建物跡実測図 (S=1/40)



第7図 2号掘立柱建物跡実測図 (S=1/40)

(3) 土坑 (第8図)

調査区のはば中央、2号掘立柱建物跡の西側に接するような状態で検出された土坑である。形態は不整形で南北約1.5m、東西約1.3m、検出面からの深さは20~30cmを測る。遺構内からは土師器の壊の破片(第9図2)や鉄製品の破片(第9図3)が出土しているが、どちらも小片で出土状態からも一括性に乏しいと考えられる。

(4) その他

その他、検出された遺構には、時期、性格ともに不明のピット群がある。ピットのほとんどは、径20cm以下の小さなもので、配列にも明確な規則性は確認できない。

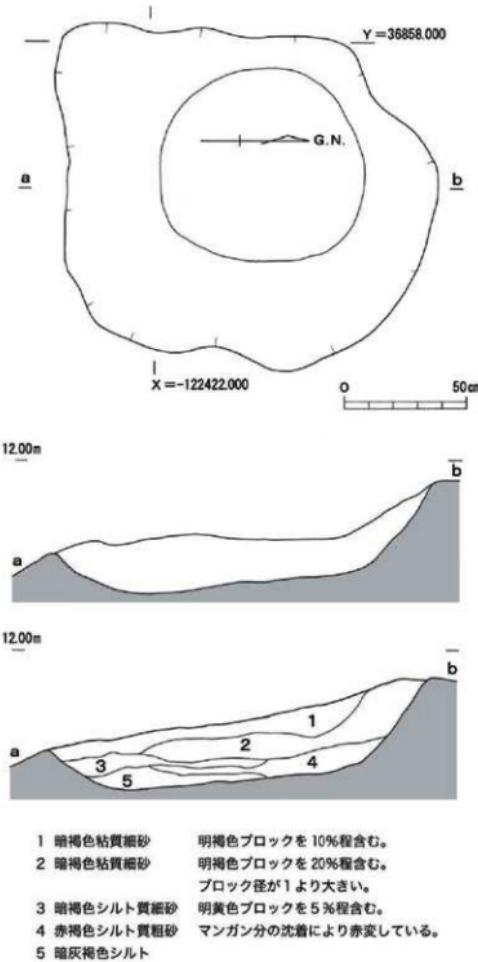
4 遺物

(1) 遺構内出土の遺物 (第9図)

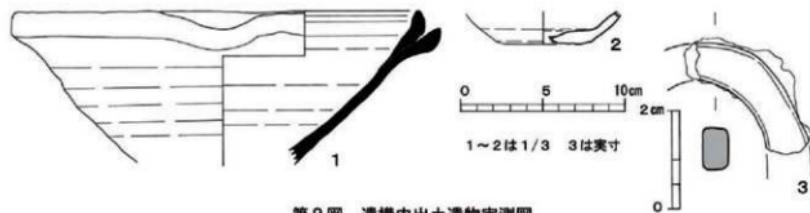
1は溝状遺構内から出土した東播系須恵器の片口鉢である。底部と口縁部の一部を欠損している他はほぼ完形である。溝状遺構内で口縁部を下にした状態で出土した。口縁部径は約24.5cm、現存高約9.4cmを測る。神出や魚住の古窯跡群例(兵庫県教育委員会1983・1998)と比較すると13世紀末頃のものと考えられる。

2は土坑内出土の土師器である。底部付近の1/4程度が残存している。表面は回転ヘラケズリやヘラによる切り離しが施されていると考えられるが、表面の摩耗が激しく判然としない。

3は土坑内出土の鉄製品である。残存部が少なく全体像がはっきりとしないが、断面や平面の形態をみると鉄具である可能性も考えられる。



第8図 土坑実測図 (S=1/20)

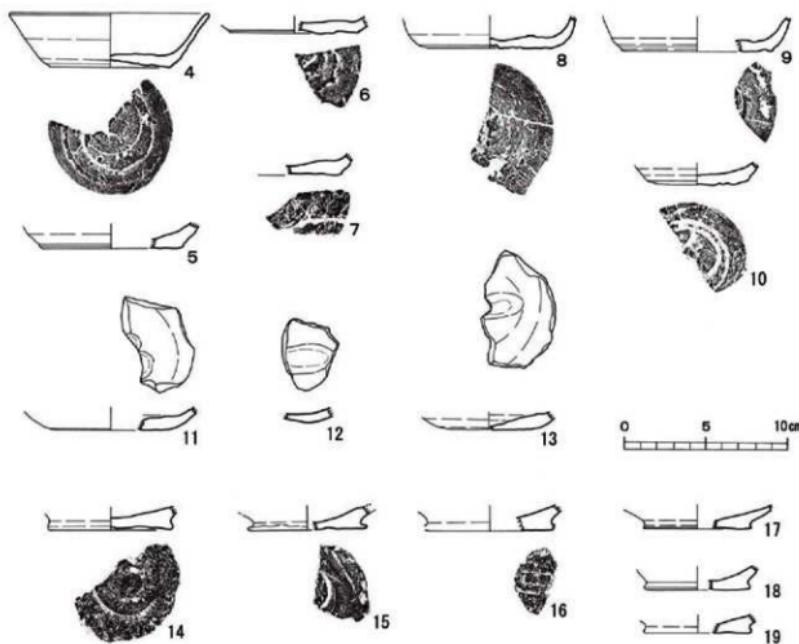


第9図 遺構内出土遺物実測図

(2) 土師器 (第10・11・12図)

4から24は包含層(6層)内から出土した土師器の壊である。4から13は高台のないもので、底部はすべてヘラ切離しである。4から7は底部から口縁部に向かい直線的に立ち上がるるもので、8から10はやや内湾しながら立ち上がっていくものである。11から13には見込み部に指頭痕様のくぼみが確認できる。破損した後に何らかの用途に転用されたものと考えられる。

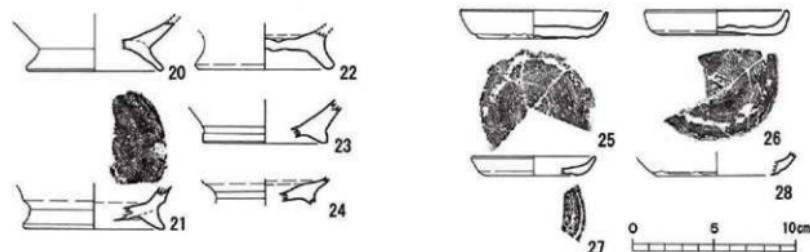
14から19は円盤状の高台をもつ壊である。全て底部のみで全体の器形はわからない。14、15には底部にヘラ状工具による切り離しの痕跡が、16の底部には板状圧痕が確認できる。17から19は器表の摩耗が激しく、表面の状態が判然としない。



第10図 出土土師器実測図① (S=1/3)

20から24は高台付の环である。23は底部にヘラ状工具による切り離しの痕跡が確認できるが、その他は器表の摩耗が激しく判然としない。21には内面に布痕が確認できる。

25から28は包含層中から出土した土師器の甕である。25と26は底部をヘラ状工具で切り離した後、その痕跡をナデ消している。27は、残存している範囲では切り離しの痕跡を消した形跡はみられない。28は残存状況が悪く、底部の切り離し方法や他の調整が確認できない。

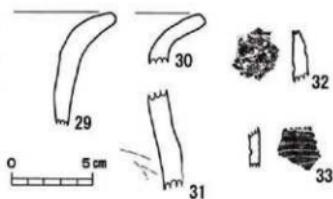


第11図 出土土師器実測図② (S=1/3)

29から31は包含層中から出土した土師器の甕である。29と30は口縁部付近、31は体部の破片である。29と30は器表の摩耗が激しく、内外面とも表面の調整が確認できない。31は外面の調整ははっきりしないが、内面にケズリの跡が確認できる。

32は包含層中から出土した布痕土器である。2次焼成を受けており、器表が赤変し、堅く焼きしまっている。

33は包含層中から出土した土師器片である。小片のため器形は確定できないが、外面に平行した沈線が巡るのが確認できる。また、外面は丁寧なミガキが施してある。

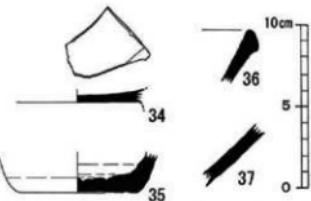


第12図 出土土師器実測図③ (S=1/3)

(3) 須恵器 (第13・14図)

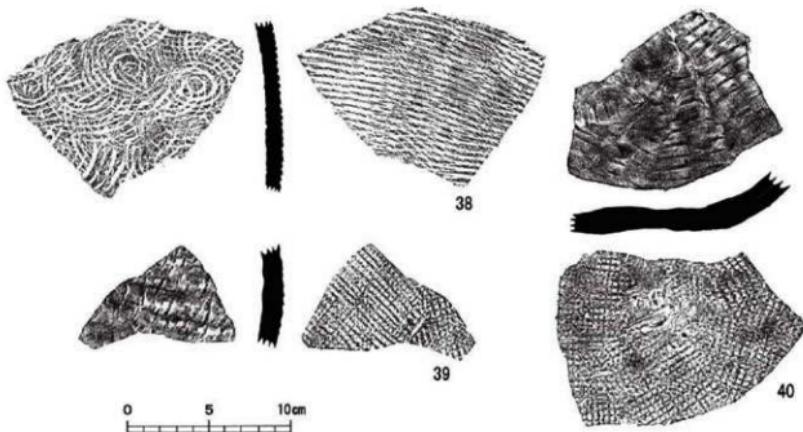
34から40は包含層出土の須恵器である。34は須恵器の高台付环の破片である。見込み部が研磨されており、陶窯に転用されたものと考えられる。

35は須恵器瓶子の底部付近であると考えられる。底面は切り離し後に丁寧にナデられており、切り離しの痕跡は確認できない。



第13図 出土須恵器実測図① (S=1/3)

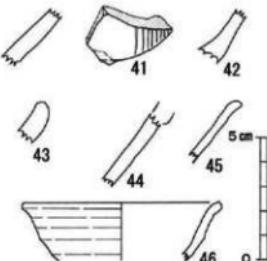
36と37は東播系須恵器の捏鉢の破片である。36が口縁部付近で37は体部である。36は口縁部の形態から考えて、溝状造構から出土したもの(第9図1)より若干古手のものと考えられる。37は内面の風化が激しく、器表が剥落している。38から40は甕の破片で、40は底部付近であると考えられる。38は外面に平行タタキ、内面に同心円の当て具痕が残る。39と40は外面に格子目のタタキ、内面に平行な当て具痕が確認できる。



第14図 出土須恵器実測図② (S=1/3)

(4) 陶磁器 (第15図)

41から46は包含層出土の磁器である。41と42は青磁である。41は外面に櫛描文が確認でき同安窯系の青磁碗であると考えられる。42は龍泉窯系の青磁碗である。施釉の状態などから15世紀頃のものと考えられる。43から46は白磁である。43と44は玉縁をもつ白磁で、大宰府分類IV類(太宰府市教育委員会2000)に分類されるものである。43は44に比較すると胎土がやや粗い。45は大宰府分類V類(太宰府市教育委員会2000)に分類される、口縁部が大きく反った白磁である。46は口縁部が外反し回転ヘラケズリを施した後に施釉されている。胎土はやや粗い。15世紀頃のものであろうか。



第15図 出土磁器実測図 (S=1/2)

(5) その他 (第16図・図版1)

47は磨製石器の未製品である。刃部を作出した後に鐵身を部分的に研磨しているが、完全ではない。研磨途中に欠損してしまい、廃棄されたものかもしれない。48は砥石である。三面に擦痕が確認できる。擦痕が残る三面には、ガジリ痕状に赤変した部分があり、あるいは鉄器を研いだ痕跡かもしれない。二面は欠損しており、擦痕は確認できない。49と50は鉄滓であると考えられる。49は激しく発泡しており、重量8.3g重と軽くメタルをあまり含まないと考えられる。50は49に比べ、26.5g重と3倍以上も重く、発泡もあまりみられない。メタルを多く含んでいると考えられ、あ

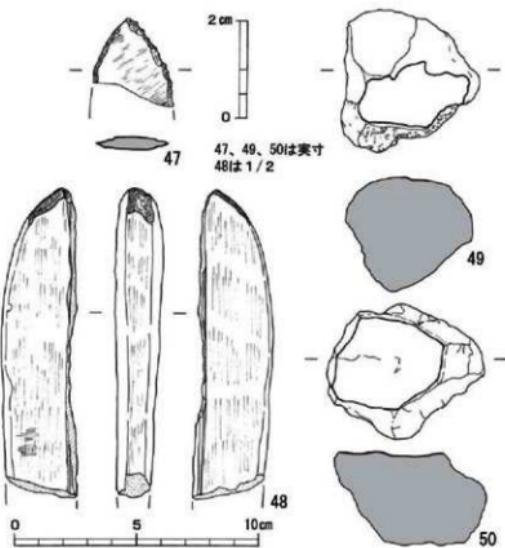


図版1 滑石製品

るいは鉄塊であるかもしれない。51は滑石製品である。二面が丁寧に磨いてあり、その他の面は剥離面に手を加えていない。石鍋などの破片であると考えられるが、どの部位であるかはっきりしない。八兒遺跡の土壙墓出土例（宮崎県教育委員会1995）でみられるような、補修用の部材である可能性も考えられる。

5 小 結

今回の発掘調査では、期待に反し直接的に山之城との関連を伺わせる遺構、遺物は確認できなかった。溝状遺構から出土した東播系須恵器や、その他出土



第16図 出土遺物実測図

遺物の主なものから、今回の調査区で確認できた遺構は、13世紀末頃のものであると考えられる。

これは、山之城と「大田城」が同一の城郭であったとしても、文献にはじめて登場する時期を数十年さかのぼっている。今回の発掘調査で確認できた遺跡は、「大田城」成立前の集落縁辺と、周辺集落から流れ込んだ遺物群を検出したものと考えたい。

引用・参考文献

- 太宰府市教育委員会2000『太宰府坊条跡』XV—陶磁器分類編—
- 兵庫県教育委員会1983『魚住古窯跡群』兵庫県文化財調査報告第19冊
- 兵庫県教育委員会1998『神出窯跡群』兵庫県文化財調査報告第171冊
- 平凡社地方資料センター編1997『宮崎県の地名』日本歴史地名大系46
- 宮崎県1927『宮崎県史蹟調査』第一輯
- 宮崎県1998『宮崎県史』通史編 中世
- 宮崎県教育委員会1995『学頭・八兒遺跡』県道高岡・郡司分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書
- 宮崎県教育委員会1998『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』I 地名表・分布地図編

山之城跡出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
1 東播系須恵器	片口体	口縁～体部	溝状遺構内	24.4	—	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰オリーブ	堅緻	精良		
2 土師器	坏	底部	土坑内	—	4.7	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	黄橙	黄橙	良好	1mm以下の橙色、0.5mm以下の褐色砂粒を含む		
3 鉄器	不明	—	土坑内	重量3.8g重			—	—	—	—	—	—		鉋具か
4 土師器	坏	口縁～底部	包含層中	12.3	7.4	3.4	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	1mm以下の灰白、褐灰の砂粒を少量含む	底部ヘラ切り	
5 土師器	坏	底部	包含層中	—	8.8	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	橙	橙	良好	精良		
6 土師器	坏	底部	包含層中	—	7.8	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	2mm以下の橙色の砂粒を含む		
7 土師器	坏	底部	包含層中	—	—	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む		
8 土師器	坏	底部	包含層中	—	8.8	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	精良		
9 土師器	坏	底部	包含層中	—	9.2	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	0.5mm以下の橙色、灰褐色の砂粒を含む		
10 土師器	坏	底部	包含層中	—	4.7	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	0.5mm以下の白色、黒色光沢砂粒を含む		
11 土師器	坏	底部	包含層中	—	7.8	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	橙	橙	良好	2mm以下の黒褐色の砂粒を少量含む	指頭痕様の凹みが内面にあり	
12 土師器	坏	底部	包含層中	—	—	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	5mm以下の赤褐色、3mmいいかの黒褐色の砂粒を少量含む	指頭痕様の凹みが内面にあり	
13 土師器	坏	底部	包含層中	—	4.7	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	黄橙	黄橙	良好	1mm以下の橙色、褐色の砂粒を含む	指頭痕様の凹みが内面にあり	
14 土師器	坏	底部	包含層中	—	7.6	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の黒褐色、赤褐色の砂粒を含む		
15 土師器	坏	底部	包含層中	—	7.0	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	1mm以下の褐色の砂粒を含む		
16 土師器	坏	底部	包含層中	—	7.9	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	灰黄	黄灰	良好	精良	板状圧痕あり	
17 土師器	坏	底部	包含層中	—	6.6	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	橙	橙	良好	1mm以下の灰褐色の砂粒を含む		
18 土師器	坏	底部	包含層中	—	6.4	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	1mm以下の赤褐色、透明光沢砂粒を含む		
19 土師器	坏	底部	包含層中	—	6.5	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	橙	橙	良好	2mm以下のにぶい褐色の砂粒を含む		

山之城跡出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
20	土師器	壺	底部	包含層中	—	8.2	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	3mm以下の赤褐色、1mm以下の灰褐色、黒褐色の砂粒を含む	
21	土師器	壺	底部	包含層中	—	8.7	—	回転ヨコナデ	布痕が残る	橙	にぶい黄橙	良好	精良	
22	土師器	壺	底部	包含層中	—	8.0	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の灰褐色、赤褐色の砂粒を含む	
23	土師器	壺	底部	包含層中	—	7.6	—	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	黄灰	良好	1mm以下の灰白、褐、黒色の砂粒を含む	
24	土師器	壺	底部付近	包含層中	—	—	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	2mm程度の赤褐色、褐色、1mm以下の褐灰色の砂粒を含む	
25	土師器	小皿	口縁～底部	包含層中	8.9	6.9	1.8	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の暗灰の砂粒を含む	
26	土師器	小皿	口縁～底部	包含層中	8.6	7.5	1.6	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	精良	
27	土師器	小皿	口縁～底部	包含層中	7.4	1.2	6.0	回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	橙	橙	良好	精良	
28	土師器	小皿	体部～底部	包含層中	—	7.4	—	—	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	1mm以下の黒褐色の砂粒を含む	
29	土師器	甕	口縁部	包含層中	—	—	—	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の赤褐色、褐色、1mm以下の灰褐色の砂粒を含む	
30	土師器	甕	口縁部	包含層中	—	—	—	—	—	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	0.5mm以下の黒色、赤褐色、1mm以下の灰褐色の砂粒を含む	
31	土師器	甕	体部	包含層中	—	—	—	—	ケズリ	にぶい黄橙	褐灰	良好	1mm以下の黒、灰褐、赤褐色の砂粒を含む	
32	土師器	布痕	口縁部付近	包含層中	—	—	—	—	布痕が残る	にぶい橙	にぶい橙	良好	3mm以下の黒褐色、1mm以下の半透明の砂粒を含む	
33	土師器	不明	不明	包含層中	—	—	—	ミガキ	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の褐灰色、1mm以下の乳白色の砂粒を含む	
34	須恵器	壺	底部付近	包含層中	—	—	—	—	回転ヨコナデ	灰黄	灰黄	堅緻	精良	
35	須恵器	丸子または壺	底部	包含層中	—	7.4	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰	堅緻	精良	
36	須恵器	東播系 こね鉢	口縁部	包含層中	—	—	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄灰	灰白	堅緻	精良	
37	須恵器	東播系 こね鉢	体部	包含層中	—	—	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰	堅緻	精良	
38	須恵器	甕	体部	包含層中	—	—	—	平行タタキ	同心円當て具痕	灰	灰	堅緻	精良	

山之城跡出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
39	須恵器	壺	体部	包含層中	-	-	-	格子目タタキ	平行當て具痕	灰	黄灰	堅緻	精良	
40	須恵器	壺	底部付近	包含層中	-	-	-	格子目タタキ	平行當て具痕	灰黄	灰黄	堅緻	精良	
41	青磁	碗	底部付近	包含層中	-	-	-	柳描文	-	釉調 オリーブ黄	胎土調 灰白	堅緻	精良	同安窯系
42	青磁	碗	底部付近	包含層中	-	-	-	-	-	釉調 オリーブ灰	胎土調 灰白	堅緻	精良	龍泉窯系
43	白磁	碗	口縁部	包含層中	-	-	-	-	-	釉調 灰白	胎土調 淡黄	堅緻	精良	玉縁白磁
44	白磁	碗	口縁部付近～体部	包含層中	-	-	-	-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精良	玉縁白磁
45	白磁	碗	口縁～体部	包含層中	-	-	-	-	-	釉調 灰オリーブ	胎土調 灰白	堅緻	精良	傾き不明
46	白磁	碗	口縁～体部	包含層中	7.0	-		-	-	釉調 灰白	胎土調 灰白	堅緻	精良	
47	磨製石器	鋸	鋒部	包含層中	現存1.7長cm・幅1.6cm・厚さ2.5cm・重量0.7g重				-	-	-	石材 砂岩		未製品
48	石器	砥石		包含層中	現存長12.5cm・幅3.2cm・厚さ1.8cm・重量127.4g重				-	-	-	石材 砂岩		
49	鉛滓	-	-	包含層中	重量8.3g重			-	-	-	-	-	-	
50	鉛滓	-	-	包含層中	重量26.5g重			-	-	-	-	-	-	
51	石製品	不明	-	包含層中	現存長4.2cm・重量7.6g重					-	-	-	石材 滑石	

■は復元径

第3節 中世城郭としての山之城跡

城跡が残る古城町一帯は宮崎市街地の近郊でありながらも複雑に入り込んだ迫状の地形が展開する地域である。昨今の宅地開発により往時の景観は往々にして失われつつあるが、この一帯には中世の城跡や神社仏閣など数多くの古跡が点在しており古来より要衝の地であったことがうかがえる。山之城跡もこれら多くの古跡の一つであり、地名にその名を残すこともあって地域でも城跡として認識されている。城跡に名を残す山之城氏については伊東氏庶家の伊東祐時の系譜上にある門川氏の一族または木脇氏の一族とされるが同氏の日向中世史における動向は詳らかでない。

1 城地について

山之城跡は東西方向に細長く延びる独立した低丘陵を城地とする。丘陵は城跡の西方に広がる丘陵地帯に端を発する北川内川（北側）、古城川（南側）の2つの小河川に挟まれている。これらの小河川は、やがて古城町馬場田付近で合流しその名を八重川と変える。現在我々が目に見える川の流れは護岸工事等の河川改良工事により往時とは景観を異にすると考えられるが、この2本の小河川は自然の堀の割合も果たすものであり城地の選定に当たってはこの立地条件が十分考慮されたことは想像に難くない。また、西端部の斜面は急峻な形で迫状の地形が発達しておらず、丘陵裾部の様子を見通すことができる尾根の出入りが少ない地形であることでも城地選定の一要因であろう。

城地を地理的観点、特に交通ルートに着目して考えると、都城盆地から青井岳を越えてくる古代以降のルートが現在の国道269号沿いに比定されている。このルート上には三俣城跡・田野城跡・清武城跡などの中世の拠点城郭が存在し、やがて宮崎平野を睨む曾井城跡へと至る。しかし、もう一つのルートとして田野で分岐し黒北を経て本城跡→山之城跡→曾井城跡へと至るルートも存在した。このルートは中世の早い段階ですでに確立されていたと考えられ、南北朝期に薩摩大隅の南朝方勢力と対峙し大田城跡（山之城跡を比定）に集結した北朝方勢力はこのルートからも南下したと考えられる。現在でも宮崎市西部城から南那珂郡北郷町や日南市方面へと至るこの山越えルートは時を経て機能している。

2 山之城跡の構造について

城跡が残る独立丘陵は、東端部（古城町字長田付近）までを合わせると約142,000m²となり広大な面積となるが、城郭としての主たる造構はこの丘陵の西端部を中心に展開しており、第17図の堀c以西の約73,000m²を城域としたと考えられる。主郭と考えられる宮崎市立古城小学校の北西丘陵部Aには、本城跡方面を意識した土塁を伴う曲輪Iや東側に延びる尾根筋方向の守備として設けられた急峻な切岸を擁する曲輪IIが確認できる。この2つの曲輪は標高的に優越しており、東西両極の守備の要となる。また、曲輪IIの切岸東側直下の尾根には土橋状の施設aを経て南面に帶曲輪状の削平段を配し比較的平坦で一定の面積を有する曲輪IIIが展開する。この曲輪IIIより東側には曲輪IVと狭小な平坦面を有するピークbがあり堀切cに至る。現在、堀切c付近は送電線の鉄塔設置により部分的に地形が改変されているが、昔から切通し状の地形であったことが確認でき、昭和の初めまでは里道として往来があったようである。城跡から東方の眺望はこの堀切のすぐ西側のピークbからのみ視認できることから、堀切を配し曾井城方面を見据える適地として城域に取り込んだと考えるのが妥当であろう。このように見えてくると東西の守備に対し南北の守備の意識はやや希薄であるが、この点については比較的急峻な北側斜面の存在と小河川により南北を挟まれている地の利を考慮したと考えることで理解したい。

第17図 山之城跡擴張図 (1/2000)



第4節まとめ

今回の調査で確認された遺構は、溝状遺構1条、掘立柱建物跡2棟、土坑1基であり調査地の遺構密度が非常に低かった。また、出土遺物は山之城（大田城）が文献に最初に現れる時期をさかのぼったものがほとんどで、直接的に城郭としての山之城との関連を示すものは見いだせなかった。

山之城の成立時期であるが、『宮崎県の地名』による推定（平凡社地方資料センター編1997）が、正しければ、「大田城」として文書に現れる建武3（1336）年以前となる。

この推定を裏付ける資料となりうるかわからぬのが、発掘調査後に行った縄張り図作成時の現地調査で、古手の板碑（図版2、3）を発見している。第17図に示した縄張り図の曲輪IIと曲輪IIIをつなぐ土橋状の施設aの西端のあたりに据えられており、碑身部から3つに折れている。幅30cm程度、厚さ15cm程度で、山形下の二条線は深く側面にまで及び、額部の突出が強くその下の碑身上部に梵字種子の墨書きが確認できる。

元号などの紀年銘は確認できなかつたが、形態から14世紀代のもの可能性が高い（原田昭一2004）。

板碑の基部がしっかりと据えられているところから原位置を止めていると考えたいが、その場合、山之城が城郭として成立した時期は、遅くとも14世紀代であることになる。「大田城」が文献に最初に現れるのが14世紀の第二四半期であるので、この板碑は「山之城」と「大田城」が同一の城郭であった可能性を時期的な面から補強するものではある。

いずれにしろ、山之城（大田城）の成立時期は14世紀の前半を大きくさかのぼることはないだろう。

今回の発掘調査では、山之城成立以前に丘陵周辺まで集落域が広がっていたこと、山之城の成立時期が14世紀前半を大きくさかのばらないであろうこと等の知見が得られたことが、大きな成果といえるだろう。

参考文献

平凡社地方資料センター編1997『宮崎県の地名』日本歴史地名大系46

原田昭一2004「板碑変遷史—豊前豊後における紀年銘板碑を通して—」『古文化談叢』第51集



図版2 板碑発見状況（第17図a付近）



図版3 発見された板碑（山形～碑身上部）



山之城全景



山之城跡遠景



調査箇所遺構分布状況



溝状遺構検出状況



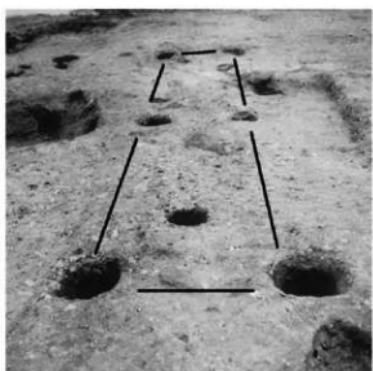
東播系須恵器片口鉢出土状況



溝状遺構完掘状況



1号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡



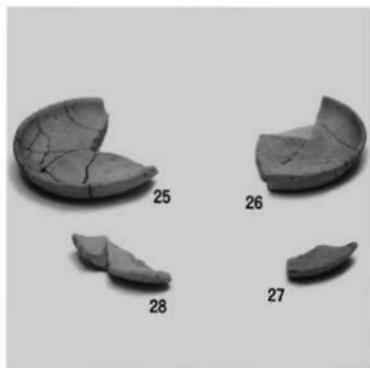
土坑



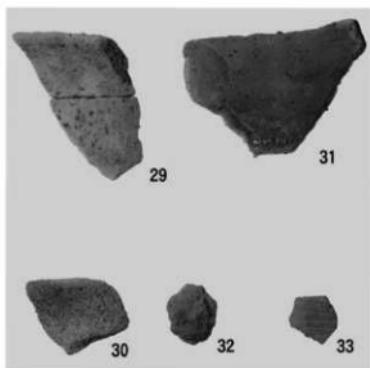
遺構内出土遺物



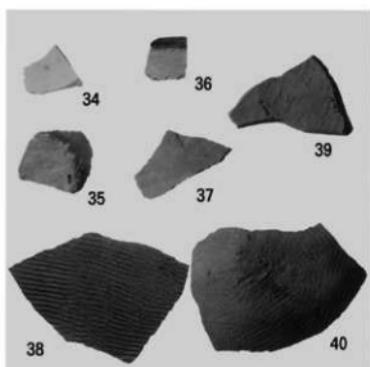
出土土師器①



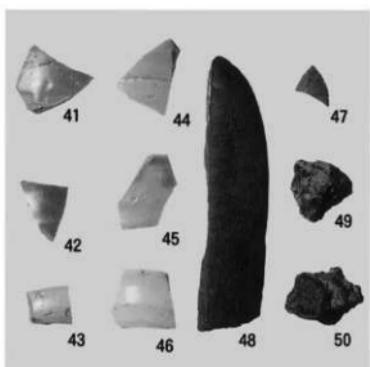
出土土師器②



出土土師器③



出土須恵器



出土磁器・石器・鉱滓

報告書抄録

ふりがな	やまのしろあと					
書名	山之城跡					
調書名	主要地方道宮崎西環状線(北川内工区)地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第171集					
編著者名	和田理啓 福田泰典					
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地					
発行年月日	2008年2月29日					
所取遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山之城跡	宮崎市古城町字山ノ城	31°53'41"付近	131°23'24"付近	2007.8.20 2007.9.26	18,000m ² (内実掘) (940m ²)	主要地方道宮崎西環状線(北川内工区)地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
城館跡	古代～中世	溝状遺構、掘立柱建物跡、土坑		東播系須恵器、土師器、陶磁器		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第171集

山　之　城　跡

主要地方道宮崎西環状線（北川内工区）地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年2月29日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 株式会社ヒダカ印刷

〒880-0862 宮崎県宮崎市潮見町13-5

TEL 0985-28-4113 FAX 0985-24-8451
